

参加者一覧 ..... 02  
連作欄 8首の連作 自由詠..... 03  
テーマ詠欄 「昼」 ..... 14  
一首評 「そらよみ」..... 18  
短歌リレーコラム 「望遠鏡」 ..... 20  
リレーエッセイ 「いちごいちえ」 ..... 22  
次回予告・編集後記..... 23

うた  
た  
そ  
ら

2024.  
November

no. 23

うたそら 第23号

発行：2024.11.01

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi\_tw <http://kohagiuta.com/utasora/>

ご感想は  
こちらまで!

Twitter(現X)  
ハッシュタグ

# #うたそら

「うたそら」では Twitter(現X) での感想をお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。

## 次号予告

第24号

連作欄 8首の連作 自由詠  
テーマ詠欄 「朝」  
一首評 「そらよみ」  
短歌リレーコラム 「望遠鏡」  
リレーエッセイ 「いちごいちえ」



## 短歌募集



第24号 '24 12/31(火) 24時

• 8首の連作 自由詠 • テーマ詠「朝」1首

第25号 '25 2/28(金) 24時

• 8首の連作 自由詠 • テーマ詠「4」1首

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください  
<http://kohagiuta.com/utasora/>

## 編集後記

やと少し秋らしくなってきた今日このごろ、皆さまいかがお過ごしでしょうか。夜に半袖短パンでいるとすっかり寒くなってしまっ、慌てて長袖パジャマを引っ張り出してきました。美術館や博物館、公園や植物園など、いろいろなところにお出かけしたくなる時期ですね。皆さんにとって、楽しいご旅行がいっぱいの秋となりますように。  
今号もたくさんさんの作品をお寄せいただきました。じっくりゆっくり楽しんでいただければ幸いです。  
次号は、大晦日×切の年明け発行。テーマ詠のお題は「朝」です。新しい一年の始まりに、すてきな作品をお待ちしております。

編集員 千原こはぎ

## 今号のうたそら 第23号

- 参加歌人様 ..... 58名
- 連作欄 ..... 42名
- テーマ詠欄 ..... 48名
- 一首評 ..... 3名

コラム 霧島あきらさん

エッセイ 福山ろかさん

ご寄稿いただき  
ありがとうございます  
ございました!



illustration: kohagi chihara

|               |                  |               |                |               |                  |                 |                  |                  |             |                 |                |                 |              |                  |              |            |                |             |        |         |              |            |            |            |                  |              |
|---------------|------------------|---------------|----------------|---------------|------------------|-----------------|------------------|------------------|-------------|-----------------|----------------|-----------------|--------------|------------------|--------------|------------|----------------|-------------|--------|---------|--------------|------------|------------|------------|------------------|--------------|
| 香椎柳           | Is               | 泳二            | 宇祖田都子          | 宇井モナシ         | 入谷聡              | 石川順一            | 井倉りつ             | 有村桔梗             | 麻倉ゆえ        | 歌島孟             | 多香子            | 松本直哉            |              |                  |              |            |                |             |        |         |              |            |            |            |                  |              |
| @kashiyaynagi | @hswelt          | @Eishimada    | @Shinnyutu2020 | @kijousan     | @irritantis      | @Hitler57       | @uta_litz        | @chattenoire_k   | @AsakuraYue | @Sim1990        | 千原こはぎ          | @NMSF708        |              |                  |              |            |                |             |        |         |              |            |            |            |                  |              |
| たえなかず         | 砂山みづり            | 寿司村マイク        | 睡密堂            | 西鎮            | さんそ              | 澤田悠生            | 桜さくろ             | くろだたけし           | くろたか湖春      | 久保田毒虫           | 香子             | 君村類             | きまぐれおゆき      | 河岸景都             | 洵れ井戸         | 片羽雲雀       | 歌島孟            |             |        |         |              |            |            |            |                  |              |
| @suzusuzu2009 | @HksbNR4wv1wj8M  | @suimitudou16 | @xi_zhen_ivUT  | @kani_hitsuji | @tanaka_yuuki    | @wjs98NwrfujVq3 | @kuro2016        | @koharu_kura     | @dokumu44   | @kmr_r09        | @Oyukinagure   | @kate_kawagishi | @kareido1111 | @areido1111      | @anjy2091554 | @Sim1990   | 千原こはぎ          |             |        |         |              |            |            |            |                  |              |
| 松浦やも          | まやけ              | 真岡まな          | 本条恵            | 古井 朔          | 福山桃歌             | 平本文             | ひなお              | 月立耀              | 薄荷。         | 畑 依裕            | 梶田朱夏           | 夏野ネコ            | 中村成志         | 内藤うへ             | ともえ夕夏        | 御糸ちち       | 深影コトハ          | みなま         | 南の島    | 水也      | みやこまなこ       | 虫武一俊       | 六厥めれう      | 村田一広       | 森内詩紋             | 杜崎アオ         |
| @ya_kon_u_no  | @mskpompomfuwa23 | @mao_or_mana  | @Singles_cafe  | @saku_furui   | @momoka_fukuyama | @aya010922      | @Hidachi_Akaru03 | @hidachi_akaruo3 | @aiedhimeco | @hakamada_shuka | @natsuneko2000 | @nakam8         | @naio_raku   | @croissant_hey_z | @kohagi_tw   | @MEATsachi | @cotoha_mikage | @minama6481 | @nrkmm | @m_ya_o | @shiomizuki1 | @mushitake | @merumumai | @mucci2022 | @N1q4oEv95glcRpu | @morisaki_ao |

計 58名

たくさんの方の参加  
ありがとうございます！



リレーエッセイ

# いちいちはい

前号の人の短歌から一語を摘んでそれをテーマにエッセイを書くページ  
今号のテーマと書き手さんは…

テーマ 椰子  
書き手 福山ろか

ヤシの木で思い出すのは、去年の二月に訪れた宮崎県の日南だ。高三の終わりの春休み、優秀賞に選ばれた若山牧水青春短歌大賞の授賞式に出席するために一人で宮崎県を訪れた。

それがすごいのが、往復の飛行機代や電車代、そして宿泊費をすべて主催の延岡市が負担してくれるということだ。さらに、優秀賞は二万円の旅行券がもらえる。全学生は若山牧水青春短歌大賞に応募してみたらいいと思う。そういうわけで、実質無料で、というか旅行券をもらったのでもしかしたらプラスで、宮崎を満喫させてもらった。

着いてすぐ授賞式で、ホテルにチェックインしたあと大学の入学式用に買ったスーツを着て会場へ向かった。今フォルダを見返していたらホテルの部屋でスーツを着ている自撮りがあった、ネクタイをちゃんとできているのか確認していた形跡がある。こう見ると今より若干幼くて、一年半で顔ってまあまあ変わるんだと思う。

授賞式で印象に残ったのは、いろんな歌人の方とお話できたこと……と言いたいところだけど、それ以上になかなかインパクトのあった出来事がある。授賞式中の選者が受賞者と少し言葉を交わす時間に、選者が一人の小学生に「これはどういう場面で作った？」と聞いていた。それでその子が、「学校の宿題で短歌をつくるというのがあって、学童でやってたときに先生が考えてくれた」という感じのことを答えて、会場はなかなか静まった。その空気感。おっとーと私は思いつつ、まあまあその場は次に進んだのだけど、今までで覚えているなかではかなり戦慄した瞬間だった。

というのはいいとして(?)、授賞式や懇親会ではいろいろな歌人の方とお話させていただいた。わたしはその数か月前に角川短歌賞で「さ

えずりに気づく」という連作で次席になっていたのだが、大学生部門で受賞されていた久永草太さんに「さえずりに気づかれた福山さんですか?笑」と声をかけていただいたり、伊藤一彦さんが「君があの連作の福山くんか」と知ってくださっていても光栄だったりした。お二人はそれからもご連絡をくださったりして、「三世代のいちごつみ」といういちごつみ企画にもゲストとして呼んでいただいた。ありがたいご縁だなあとつくづく思う。

翌日には雨月茄子春さんに車で青島、スーパークレー、釣り、日南フェニックスロード、宇都宮宮などに連れて行ってもらった。ヤシの木はヤシの木っぽいもの多くてどれが本当のヤシなのかよくわかってないけれど、一応日南のドライブロードにあったのはヤシで合っているらしい。短歌は、宮崎を旅行しているときに作った一首。



福山ろか

パーキングエリアの風にないはずの旧姓を思い出しそうになる

Dayilly

井倉りつ

ワスレグサ きつと未来パートに並べばすぐ売れると思う  
待たないと決めた夜からさみしいと思わなくなる夜を待つて  
見えないしさわれないけど「注ぐ」って言うから液体なのかな愛って  
喚きたい「愛してよ」ってアクセルを全力で踏む 誰も見てない  
死にたさと死にたくなさど ムカデって前にしか進めないんだってさ  
ほうじ茶のジェリコ煙草の味がする みんななにかの生まれ変わりで  
ワスレグサ あの人にだけ効くといい 泣き顔も可愛かったと言って  
薄い胸細い脚浮き出た背骨ぜんぶわたしがおぼえておくから

自然の驚異

石川順一

扇風機羽根を外され清められ元に戻されタオル掛けられ  
伐採の宣言モッコウバラは今アブとテントウムシを抱えて  
アブは今新芽に着陸黒き腹黄色き縞に薄日を浴びせ  
模様無きテントウムシが新芽に居る黒き背中何ができるか  
晩秋にマリーゴールド増えて行きアマリリス咲かぬ夏を想起す  
赤き実がクロガネモチを覆う時木に括られし犬が吠え出す  
藤の木は半分は駄目になるものだ土曜に喫茶店に行くこと知ること  
ルコウソウが泡立ち草に代わり行く水路に素早く動く小魚

## 連作欄 8首の連作 自由詠

#うたそう

あめふらし海岸線で干からびて祈りは波に返されている  
 笑つてはいけないような気がしたのあなたが海を見て話するとき  
 シオマネキ涙をすべて呼び寄せてあなたを溺れさせる満潮  
 ヤドカリが捨てていったか巻貝は海水ばかりを抱えて沈む  
 砂浜に貝殻片だけが落ち永遠に離れてしまった伴侶  
 荒波もかつては蒼い風だった手と手が触れて立ったささなみ  
 潮だまり急にしゃがんだ子の影を蟹の親子が逃げ出していく  
 海岸に築きかけのまま残されて風がけずつていく砂の城

屋上獲部23

屋上のフェンスを抜けてくるバスの静脈透けて見える夕暮れ  
 屋上にあるバス停に来るバスを待つ人の傘みな同じ傘  
 屋上はバスに乗るひとばかりいて世界も同じ虹だと聞いた  
 バス停の時間は錆びてさび付いた傘をさす例えば夢などを  
 あのバスは虹と同じで人間も時計通りの運行をする  
 降りかかる不快なものを防ぐためバス停はみならせん階段  
 路線図の消えてしまったバスが来てただ一人だけ降り立つ螺旋  
 屋上の枯れた巨大なベンジャミン降るものどもを匿う庵

飲み込んだ声があふれた百日紅やさしく強くきれいでいたい  
 晚鐘が職員室を取り囲みもう一度ひまわりを抱きたい  
 シューゲイザー聴いているヘッドホン重くあなたはいつまでも夜のま  
 夏がいた分だけ部屋が広くなり小さな声で二度呼んでみる  
 河川敷ひと駅歩く 新しい靴 少しだけでも いい匂い  
 僕の死後僕たちは海に出かけてあのサングラスをなくして帰る  
 手をつなぐことは約束ではなくて今は真夏の顔もおぼろげ  
 帰り道川沿いの公園に立ち寄ってあなたの熱を思い浮かべて

南洋の風に吹かれていたワタシ

どこまでも逃げ出したくて。うかつにも君を忘れてしまう朝焼け  
 ゴールデンシャワーの花は降りそそぐ南洋の陽を押し花にして  
 業深く、連理の枝と呼ばれないままに、クビシメイチジクの木よ  
 海ほどのジンベエザメの背があれば、サンゴは浅葱色の斑点  
 おやたちは、夕陽に揺れる海よ、君にさよならをして陸を目指した  
 祝祭のような暑さに囲まれて、風が私を追い抜いていく  
 緞帳を何度もめくるように、夜の街灯ならぶ道を歩いた  
 この空に見えない星のあることを豪州の旗振れば思いき

に留まらず、人類が長い歴史のなかでクラシック曲に抱いてきたイメージにまでアクセスできるとような心地をもたらす。

ここからは、わたしの作ったプレイリストの一部をさらにご紹介していきたい。既にこれらの歌をご存じの方もいるかもしれないが、詠み込まれている曲を聴きながら改めて鑑賞していただければとてもうれしい。

放課後の窓の西の中にあてとろいめらいとまどろむきみは

／山田航『さよならバグ・チルドレン』

シューマン作曲の「トロイメライ」は、夕方のチャイムに採用されている地域もあるだろう。郷愁を誘うゆったりとしたメロディーは茜色の景色によく似合う。トロイメライはドイツ語で「夢想」を意味するが、ひらがなで表記することにより、とろけるようなまどろみそのものへと変貌する。さらに、窓を隔てた夕焼けに「きみ」が溶け込んでしまったような描写も巧みで、それは作中主体がみる夢のようにも思われる。音の響きと言葉の意味、歌を構成するすべてが調和して、この作品自体が素晴らしい音楽のようだ。何度読んでも感嘆してしまう一首である。

ドヴォルザークドヴォルザークとじやがいもを新世界へと掘り起こしたり

／深海泰史  
(2024年5月20日毎日歌壇 加藤治郎選)

こちらにも、斬新かつ納得感のあるオノマトペに唸った。読むと笑みが溢れる一首だ。ドヴォルザークの名前を音楽の教科書で見るときなんとなく強そうな響きだとは感じたが、じやがいも掘りとこんなにマッチするとは。頼もしい掘りつぶりである。ややこじつけかもしれないが、分解してみると、ドは土、ヴォルは掘る、ザークはスコップの音に感じられてしっくりくる。牧歌的な光景と重厚で壮大な曲のギャップがおもしろく、交響曲なので大人数で掘っているようにも思う。「新世界より」はアメリカ滞在中に故郷のボヘミアに向けて作曲したと言われるが、じやがいもは地上に辿り着きどんな感想をもっただろう。

踏み抜いていますぐここへ落ちてきて雨の夜に弾くら・カンパネラ

／永汐れい  
(2023年3月20日毎日歌壇 加藤治郎選)

リストの名曲で「鐘」を意味する「ラ・カンパネラ」。激情を湛えつつもそれを押し殺すようなピアノが「いますぐここへ落ちてきて」という切実な思いと響き合う。ピアノを弾いて天ほど遠い場所にいる相手に音を届ける。それは串の鐘のようでもあるが、踏み抜くことを導くさまが痛ましくも美しく、胸を打たれる。この歌と出会ってからというものの「ラ・カンパネラ」の物悲しい旋律が打ち付ける雨に聞こえる。描かれた情景があまりにも鮮烈に曲と結びつき、

いつまでもわたしの心を離さない。

エリーゼのためにをわたしのために弾く母の手背に棲む聖書タコ

／鷹橋ねい

ベートーヴェンの「エリーゼのために」は、ピアノ経験者であれば暗譜している人も多いだろう。幼い頃の記憶だろうか、母の愛を感じさせる美しい光景だが、この歌の印象は仄暗い。それは翳りのある曲の影響だけではないだろう。まず、作中主体の目がとらえるのは母の顔ではなく、痛々しい「聖書タコ」であること。「棲む」という表現も生き物のようで不穏だ。また、曲名の記載ではあるが「のために」が入れ子になることで空虚さが漂い、献身に潜むエゴが強調されるようにも思う。母の行為を重荷に感じているのだろうか。言葉の選択や配置に必然性があり、この歌の醸し出す気配が曲の印象をも左右する、そんな力のある一首だと感じる。

最後に自作を。みなさんの短歌もぜひ読ませていただきたい。

夜想曲 東の果てで星を撒くあなたの密やかな指づかい

／霧島あきら



# 短歌リーコラム

## 望遠鏡 23

短歌にまつわるあれこれについて

自由きままに書くページ

今号のテーマと書き手さんは…



書き手

霧島あきら

### テーマ クラシック音楽に

### まつわる短歌

親指から順に折り曲げて音を数える。短歌に親しむようになってからわたしの日常の一部となった動作だ。自分で詠むときも誰かの歌を読むときも、リズムを確かめるために指を動かす。意識していなくても、頭のなかで数を唱えていると自然に指が動き出す。脳と指先の連動を感じるるとき、高校1年生まで続けていたピアノレッスンの記憶が頭をよぎる。「12345」が「ドレミファソ」にふと変換される瞬間があるのだ。正直あまり熱心な生徒ではなかったし、いまは一切ピアノに触れることがなく音感も狂ってしまったが、幼少期からの経験はなんらかの形で身に留まるのだと実感する。

このコラムでは、わたしが憧れてやまない短歌のテーマについてお話したい。それは「クラシック音楽にまつわる短歌」だ。具体的には、クラシック音楽の曲名などを詠み込んで詩のエッセンスにしている歌のことである。美しく叙情的であったり、激しく悲痛であったり、音楽がもたらす多様なイメージを纏った短歌は立体的な響きを持つ。その奥行きをうっとり味わうのが好きだ。そういった短歌を見つけては、プレイリストに加えるようにノートに書き留めている。

手を広げ人を迎えた思い出のグラドウス・アド・パルナツスム博士／服部真里子『行け広野へ』

美しく大胆な構成に衝撃を受け、魅了された一首。下の句はまるまる博士の名前であり、ドビュッシーによるピアノ曲のタイトルでもある。こうして詠み込まれていると、曲のタイトルと知っていてもどんな人物なのか想像せずにはいられない。微笑ましさを滲む上の句から、やさしげな博士の顔を思い浮かべる。架空の人物だからはずきりと思いつけないのは当たり前なのだが、それを思い出せない自身の遠い記憶のように錯覚する。また、駆け出すような華やぎのある曲調も後押しして、作中主体はその人の来訪がうれいのだと感ぜられる。それは博士のことだろうか。下の句をあくまで曲名と捉えるかひとりの博士と捉えるかは読者に委ねられていることも、この歌の謎めいた魅力に寄与していると思う。

この世にはさまざまなジャンルの音楽が存在し、たとえば童謡や歌謡曲を踏まえた素晴らしい短歌も当然あると思う。そのなかで、わたしがとりわけクラシック曲を題材にした短歌に惹かれるのはなぜだろうか。ピアノに親しんだ経験も影響しているだろうが、主に2つの要素によるところが大きい。それは、①（オペラなどの声楽曲を除き）有名曲の大半は器楽曲で歌詞がないこと、②国や時代の垣根を越えて多くの人に認知されていることだ。まとめること（ほぼ）非言語的な芸術表現で、人類の歴史の共有財産という側面が強いこと」だと思う。ほぼ、としたのは、基本的に曲名がついているのでその言葉の意味と結びつけられるからだ。また、使われている楽器や作曲された背景などを知ると付随する言葉は増えてくる。しかしそれでも、通常わたしたちがクラシック音楽を聴く際に受け取る言語化された情報は少ないと言えるだろう。

歌詞のない音楽を聴いて想像を膨らませるとき、わたしたちの脳には、その調べや曲が終わってからも続く余韻が、夢まぼろしのように曖昧な風景として格納されると感じる。そして、その曲にまつわる短歌を読んで言語化されたイメージに触れるとき、もともと抱いていた印象が再構築され、自身のなかからも新たな言語的イメージが生まれる。その瞬間がたまらなく好きだ。また、本来、曲から得た感覚はとらえどころがないものも多く他者と共有するのは難しいと感じるが、短歌に組み込まれた曲のイメージは輪郭が際立っている。そういった短歌を鑑賞することは、ひとりの歌人の感覚を知ること

### 蝶待つ花

路地裏に吐いた煙の行先を気にするなんて馬鹿みたいだね  
またきみにただ会いたくて会えただけでは物足りなくて塞ぐf  
誰からも教わらなかつたからずっとそれしか知らぬ音階の恋  
屋顔がもつと欲しいとねだつたら夜を足止めしてくれないか  
砂時計のこり少なくなつてから臆病になる欲張りになる  
覚悟などしなくてもいい新しい頁をめくるその手で弾いて  
酔うほどに甘く擦ぐる声の羽CDRでは聴けぬ音  
先がない（そんなことない）散るまでは（枯れた後でも） 国色天香

片羽雲雀

### 平日の喫茶店

喧噪のエアポケットの居酒屋で偏食の友と飲む耐ハイ  
厄介な病気の話縁遠い具体名からにじむ妖しさ  
あと一人集い三人平日の午後も紀伊国屋はボロ混みで  
十月はまだ夏のよう満席の三件目の純喫茶でへたる  
世渡りのうまい層とは永久に渡り合えそうにない始祖鳥  
ルービックキューブのようにうまいことボックス席が空いて一息  
俳壇のヒエラルキーの現況を長々語りながらプリンも  
「もう少し涼しくなれば再会を」約し阪急電車で帰る

涸れ井戸

### 私のヒーロー

毎日に飽きて欠伸をする前に白いカラスの話をしよう  
宝石をひとつも持たず生きている 私もいつか名前が欲しい  
敵なんて存在しない 変身の呪文のメモを鞆にしまふ  
世界より三時のお茶が大切で何が悪いの、雲が千切れる  
怪獣も休みたいたはず 幸せは空が青いと知っていること  
裏道を通つて帰る冒険を覚えていてよ明日の私  
ヒロインになりたいなんて思わない剣も魔法も使いたいたから  
今日までを生きて偉いと買うケーキ私はいつも私を救う

河岸景都

### 声の毛布

君からの糸のふるえを待ちながら秒のさざなみ返りつづける  
網の目にすくわれ鱗が触れあつた魚のようにきみと出会つた  
いろいろなものに落ちてくきみからの声の毛布につつまれながら  
ぬくもりもぶつきらぼうな告白もひび割れごしのキーパッドのなか  
文字列で逢瀬をかさねるたしかさよすべてのきみは0と1の雨  
指先で上下左右を迷いきみからこのころスマホに余熱を生めり  
受取の通知は遠いきみからのこのころスマホに余熱を生めり  
きみからのメッセージが来てはわがこころ撫で愛される指のおなかで

きまぐれおゆき

告知

# 短歌ラボ

実験的  
短歌  
ワークショップ

新しい短歌のワークショップがはじまります。はじめて作る人から日頃短歌を作っている人、ベテランさんまで、どなたでもめいっぱい楽しめる実験的な短歌の場を目指します。全6回、きっと全部楽しい！ぜひ一緒に、短歌でわくわくしませんか？

全6回  
すべてご参加いただいても興味のある回のみのご参加でもOKです  
定員 8名  
各回

参加費  
各回 700円

研究員  
うしりゅう すけ  
牛隆佑  
千原こはぎ

会場  
JR草津駅近辺  
@滋賀

第1回  
短歌のマジカルラーニング  
小説の書き出しから短歌を作ってみよう。はじめて作る人にも！  
2024年 11/30 (土)  
対象: はじめて作る人 作ったことある人

第2回  
短歌のワンダーマテリアルとは  
なんでもないところから自分だけの詩情を見つけ出せ！  
2024年 12/28 (土)  
対象: はじめて作る人 作ったことある人

第3回  
短歌のカラフルバリエーション  
短歌の展開がワンパターン？ カギは「接続詞」だ！  
2025年 1/25 (土)  
対象: 作ったことある人

第4回  
短歌のマジカルラーニング2  
小説の書き出しから短歌を作ってみよう。はじめて作る人にも！  
2025年 2/soon... (土)  
対象: はじめて作る人 作ったことある人

第5回  
口語短歌のためのネオ文語研究  
文語を知ることの可能性を広げよう！ 口語短歌を作る人に。  
2025年 3/soon... (土)  
対象: 作ったことある人

第6回  
短歌のセオリーをぶち壊そう  
短歌のセオリーはなぜセオリーなのか？ 学んで壊せ！  
2025年 4/soon... (土)  
対象: 作ったことある人

ご質問等は、X(旧 Twitter)の牛隆佑(@ushiryu31)、千原こはぎ(@kohagi\_tw)までDMにてお問い合わせください。

主催：千原こはぎ | <https://tankalab.wixsite.com/info>

詳細、お申し込み等は  
こちらのサイトから！



魔王へ

目を閉じてなお降り注ぐ光から理由を探す毎日が来る  
指切りは大人になるほどしなくなつてこれほどに言葉は水の重さ  
パレードは死者のためにもあることを信じて遺作を再生している  
また開けるジョハリの窓に佇んでいるわたくしに会うための曲  
人間も心臓がある 魔王のまま地上を去つた櫻井敦司  
夜の海の暗さも深さも冷たさも知っている声が歌う愛だつた  
目を閉じて眠りに落ちる一瞬に触れる死を死ぬまで繰り返し  
降り注ぐ光が連れてくる朝にまだ立っていてまだ立っている

君村類

将棋駒く菱湖書く

香子

宝石やブランドバッグや腕時計それより望むは我だけの駒  
運命の人に出会つた気がしたの 菱湖の曲線、愛撫のようで  
焦がれても手にすることはできないと諦めし駒いま我が元へ  
若き日は鉄馬に恋してた 今は木片の馬を愛する  
「所有者が私なんかでごめんね」と一緒に歳を取ろうね」を交互に語りかける夜  
この駒で最初に並べるべき棋譜は吾を導きし棋士の勝負  
彩りを深める虎斑に相応しき姿を求め指し続けていく  
いつの日か私の躰は朽ちるけど駒よ、その美を留めていてね

晩秋の邂逅

秋が来たひとりぼつちの秋が来た並木道には月が咲くなり  
秋が来た優しく包む悲しみは一昨日吹いた木枯らしのよう  
秋が来たそして貴方もやってきた出逢えたことを心ゆく迄  
秋が来たふたりぼつちの秋が来た涼しい日々が続けばいいさ  
秋が来た少しづつだがすれ違ふそれでも願うお互いのこと  
秋が来た貴方が遠くなつてゆく手を広げてでも届かない月  
秋が来たひとりぼつちの秋が来た結局僕はひとりきりだね

久保田毒虫

なにもいない

くらだたけし

のぼつたらおりの階段生活の基準は高いところにはない  
五十年ここに存在し続けて窓の開け閉めにもこつがある  
物置きはいくらか人をだめにして刈り込みバサミばかり四つも  
あげた人ももらつた人もいなくなり贈り物だけ消えずに残る  
境界を越えて芝生が伸びてゆく別に未来があるわけじゃなく  
めずらしく蛇を見たのでこれまでもどこかに蛇はい続けたのだ  
誰もいない二階になにかいるようで二階に行けば一階にいる  
壁にふれるまで手を伸ばす暗闇になにもいないという前提で



一首評

# そらよみ



前号の「うたそら」から  
気になった一首をとりあげて  
200文字くらいで語る  
一首評のコーナーです

審判に渡した金が足りなくて負けても金は返ってこない

くろだたけし

全体が何らかのメタファーで構成されているような一連の、最後の一首。人生における挫折や不安を、それらの種類ごとに鑑別しているような肌触りがある。この歌では、賄賂と敗北が詠われていて、恐らくはスポーツにおけるそれなのだろうが、一連における他の歌との共鳴を重視すれば、戦争の一面ともとれるようにも思う。いずれにしても、連作に通底する自嘲的態度のディテールとそこに残る何とも言えない不安感に惹かれた。

一首評

西鎮

史上初、史上初って繰り返す暑さを語る  
語彙の少なさ

六廐めれう

今年の夏を代表するような一首。ここ数年、「史上初」が何回繰り返して使用されてきたか。この言葉をタメ押し風に繰り返すことにより、もう「語彙」の事さえ構ってられないほどの熱気であることを強調している。

さらに、「史上初」が間断無く重ねられるとは、この大地が抛ん所ない箇所へ向かっている事も明示している。ただ一つの読点が、不安さを盛り上げている。

一首評

中村成志

まもなく閘、閘ですお出口左側3番のりばに到着します

井倉りつ

電車が「閘」という駅に接近する際の車内アナウンスという形ですね。中澤系へ3番線快速電車が通過します理解できない人は下がってを連想しつつ、お出口左側3番のりば、の選択が妙に心に残りました。「出口」の先にあるのは、夜閘。主体は「閘」で下車するのか？他の乗客が閘に降りていくのを傍観しているのか？急行列車から、閘の近くのどこかへ向かう各駅停車に接続するのか？そのまま「光」まで乗車を続けるのか？

一首評

入谷聡

## 夏季休暇

熱烈な積乱雲は去りゆきぬおそい休暇の湯宿をさがす  
制服を脱ぎたる腕の軽やかさ動物園を抱えこめそう  
ゆく夜の流れは絶えずビールから鉄板焼きにとどまらなくて  
神々の逢瀬をかくす雲立ちぬスマホをむける富士の頂き  
よーじやの顔パフェいいね、ときおりは映える写真を日記にはさむ  
人波の古都の景色を抜けだして青の列車で丹後の海へ  
光とも影とも思う休暇なり空を眺める国に暮らして  
コロコロとトランクひいて秋の陽の溜まりたる住み家にかえりつく

桜さくら

## 靴

噂ではお試しだけで背を向ける人の視線に囚われた午後  
触れられて持ち上げられて試されて君のかたちに補正されてく  
飽和する量産型は慣れてない 指でも名でも差されることを  
雨の日に出かけた事が無い君は虹を見たことが無いと言った  
近づくで見えないものが増えていく 踏み切る横の水溜りとか  
汚れとか擦れた傷とかにおいと全部共有してきたデータ  
馴染ませて育てたからだ、保たなくてごめん。しょんぼりさせてごめんね。  
ありがとう 見つけてくれてありがとう、共に歩いてしあわせでした

さんそ

## 音楽

prelude 零れて鳴らす黒鍵はビル・エヴァンスの人生の色  
調律のとれた楽器で作られた完璧な曲しか知らない僕ら  
洋楽しか聴かない君の車でどこに行ってもおんなじ景色  
笑顔は絶えるかもしれないが音楽は絶えない家庭にしよう  
旋律が君の頭を占拠するドドソラソラソファファミミレレド  
抱きしめてあばらの音が出るほどに壊れた楽器は二度とならない  
蓄音機流れる声は君の物だけどこそこには心がなかった  
背中からトランペットに射抜かれて永遠に孤独を掻き消す響き

澤田悠生

## ロータリー

朝らしい朝が来そうな匂いさせる特に予定もない週末が  
海の色みたいなそれを黒板と呼んで向かった未来もあつて  
改札をぬければ馬上少年のままで手をふるきみがいた夏  
雨の来そうなペダストリアンデッキから運転席まで傘はいらない  
モーターは蜘蛛の巣よりも蟻の巣の気配がして、嫌じゃなかった  
下り坂の天気告げる予報士の明るさでさようならって言って  
もうきみの帰らぬ部屋でじゃがいもは芽をくりぬかれカレーになった  
夜と朝の汽水域めく駅前ロータリーから生まれる、旅は

西鎮

## 「そらよみ」一首評募集



ご投稿はこちらの  
投稿フォームから!



前号の「うたそら」からあなたのお気に入りの一首を引用し、その歌について200文字以内でお書きください。  
お一人につき一首まで。  
ご自分の短歌ではなく、他の方の作品でお願いいたします。  
公序良俗に反するもの、作者や他人の人格を傷つけるような投稿は掲載できませんのでご注意ください。

紅筆をくちびるにあて塗っていく気持ちを秋に変えていく色  
 ボルドーのワインじゃなくてボルドーのセーター買おうZARAのセールで  
 靴箱にブーツとともに眠ってた去年のイチョウ枯れた思い出  
 思い出を始めていける服を着るエキストラでも主人公でも  
 秋好む心になじむあかね色長いソワレの幕はひそかに  
 柿色のワンピース着たシルエツトだけを残して暮れる宵空  
 閉じていた本のページにまた今年一番紅いモミジをはさむ  
 深まっていく色彩に気づいたら転がり落ちて見渡せば秋

## 十月の空

寿司村マイク

キツネ目の八田興一の横にあるギャンブル依存ケアのポスター  
 近づいたおじさんにそっと耳打ちし未来を創造する箱男  
 休日の競馬場でみるおじさんの格好をして場内に俺  
 赤ペンは売っていないが赤ペンを周りのおじさんたちが持つてる  
 締め切りを知らずチャイムがだんだんと速度を上げて騒ぎだす午後  
 (十五時四〇分) 全速で秋空を抜けたた坂とルメールそして息だけがある  
 たわみゆくフェンスの格子は直線へ俺の重さをやや傾けた  
 場内に血圧計は設置され行き交う床に散る菊花賞

メルカトル図法の世界大陸が地球の肺に見えて怖い日  
 見たんだよエレベーターを共にした蚊が後ろから付いてくるのを  
 これまでは気にも留めない木漏れ日がしくじった日は集まってくる  
 今日もまた眩しい面を被ってる反対側のプラットホーム  
 エイリアンみたいな蘭に睨まれておけいはんから京都に入る  
 フェンスから外に乗り出す植物が開花した手を差し伸べている  
 内臓の如きサックス煌めいて聴衆たちのストーンヘンジ  
 日常が非日常にのみこまれ心が爬虫類の目を開く

## 隙だらけの叙情

たえなかず

会えるかな、十年後にも ハロウインの仮装のままで手を伸べたひと  
 病むまでの一年ほどはめくるめく短し愛の一撃激し  
 水晶 彼女のいつもそ寒い顔の善人ふりがうれしい  
 死んでゆく演技はひとつ 雨の日と冬はいつそう磨きをかけて  
 来月も会おうビジネスホテル風ラブホで懺悔を終えて笑顔で  
 正式に宣告されていないのでまだ別離とは思えないんです  
 低音部がきれいよねってさよならを告げたあなたの声を評して  
 往きましよう都会さびし野呵責の野ハロウイン過ぎててもひとり魔女めく

冬眠のリスを起こしてゆくように給食ワゴンを鳴らして進む

◆ 松浦やも

みどりごの小さき陰囊つつみもてやさしくあらふ沐浴の昼

◆ 松本直哉

まひるまの京浜東北新橋を、あの新橋を通り過ぎたり

◆ 御糸さち

茜さす地球儀の昼 先生に教わる私の限界地域アネックスメールネを

◆ 深影コトハ

真昼間の鳴く鹿たちの森の奥かこわれし庭に射干玉の黒

◆ みなま

女子校の出汁が効いてるあたしたちせーの！お昼間からごめんさーい！

◆ 南の島

残り香をさがすまひるの迷路から遠くきらめくあなたの声が

◆ 水也

昼すぎに気だるいねむさ握りこみあなたは何をしているだろう

◆ みやこまなつ

なんらかの比喩にもならず汗だくで来て汗だくで帰った真昼

◆ 虫武一俊

風よけのつもりか僕が昼寝する傍らに来て猫昼寝する

◆ 村田一広

人生を八十年と仮定せば我が時いまだ昼下がりに

◆ 森内詩紋

わたりどり渡ったあとにまひるまの白磁の水辺より冬はくる

◆ 杜崎アオ



- ◆ チェキは影を上手く表現できなくて真昼間きみの頬がつるりと
- ◆ 引越の段ボールをあしたの恋の方舟として午後には微睡む
- ◆ 二度寝のち昼寝はかどる休日には秋のはるけき天球儀澄む
- ◆ 太陽のかがやく時間すこやかな時間あなたに逢えない時間
- ◆ 身長が少し足りなくて午後二時の書庫の光に手が届かない
- ◆ 陽ざしの中で昼酒 虚空は優しく私を包む
- ◆ 昼休み風に吹かれて待っている空を見上げてただ伸びをして
- ◆ 何度でも思い出せるの 夜の熱、明け方の夢、まひるのくちづけ
- ◆ 無いはずの幻ほのかに見せつける真昼の月よ夜の太陽
- ◆ 図書館の帰りに横切る歓楽街の昼寝の顔しか知らない私
- ◆ 昼休み私の抜け殻置いてきて蜜を求めてコンビニを舞う
- ◆ 昼間からビールを呷る父の背が妙に伸びてる 声はかけない
- ◆ まさけ
- ◆ 真岡まな
- ◆ 本条恵
- ◆ 古井 朔
- ◆ 福山桃歌
- ◆ 平本文
- ◆ ひなお
- ◆ 薄荷。
- ◆ 畑 依裕
- ◆ 袴田朱夏
- ◆ 中村成志

デスペレートな夜に

多香子

狸やら狐が武將に化けたのか緑だ赤だと平和な合戦  
古本の匂いも嗅がずアマゾンの本の密林彷徨するのみ  
たそがれにあなたの手相なぞりつつ明日の不安打ち消している  
月見草明日の私が怖いから月よりの使者を待ちわびても無駄  
唇は冷たい風を呼んでいる 小雀さむいか私もさむい  
こんなにも金の鳥降る並木道 足ふみしめて通勤の朝  
秋の日のつるべ落としては焼き芋がほっこり恋しい背中が寒い  
夕焼けに君がラップを吹いている ああ黙示録の夜明けが近い

ソルフエージュ

ともえ夕夏

ドはどこに仕舞ったのかを忘れまた買ってしまひし爪やすりのド  
シは列を乱さぬやうに生きるのを少し窮屈だと思ひ初むのレ  
ミはミシン目にさからつて大胆にちぎれてしまふ応募券のミ  
ファはファストファッションでさへ気軽には買へずに帰る冬支度のファ  
ソは速度超過の秋を取り締まるやうに半袖ばかりを着るのソ  
ラは楽な仕事にひそむ漆黒の就業規則に吐くためいきのラ  
シは信じられないほどに山盛りの唐揚げの香に噎せかへるのシ  
日常をさも楽しいげに闊歩するやうにと楽譜に書きたしてをく

なんでもない

千原こはぎ

ふかくふかくひと雨ごとに冷えてゆくあなたは秋に生まれたせいで  
できるだけ惰性にならないよう生きる逢うためだけにある毎日も  
ひとりだけまだ夏にいて焦がれてて 十月、二十八度の真昼  
ひまわりはもうしなだれてまっすぐにきみを見つめることができない  
大声で呼んでも届くことのない雨音だけが満ちる明け方  
でもそんなうまくいかなないやめること諦めることさよならのこと  
オレンジに落ちていく空きみはもうわたしのにならないと決めたね  
約束のないまま秋を冬を春をなんでもない顔で歩いていく

小林

中村成志

撫子へ乗り伏す鬼の色として野分ののちのはるか朝焼け  
見上げれば今日も空気があるはずで肺が膨らみ喉がすばまる  
沢沼いも落ち葉に埋まりはみ出せと言わんばかりのセンターライン  
川向こうのサイドスローの小林が石届けくる虹をまぶして  
蜜柑ひとつ沖へ向かえば幾千の白を散らして今、相模灘  
野菜サラダに肉の脂をかけます秋の日暮れが星に震える  
夕闇はまず紅が消え藍が消え純白が消え尾根の薄影  
白金色の梨を生姜で煮る宵の何年ぶりの手紙に封を

月のない夜にあなたが置いてくるそのレイアップシュートゥックし  
 スプーンを入れれば月じゃなくなつて夜のわたしをゆるしてプリン  
 月までの夜をゆくとき足音はふたりでつくる組曲になる  
 あれは月、おでこには雨。こんなこと話せばきみはわらってくれる  
 どこまでも追いかけてくる月だつて逃げたいときもあるのだろうに  
 類想の森を抜けると明るみにことばを知らぬ月が出ていた  
 月面にふれたSLIMは橄欖のいろをわれらに報せてねむる  
 (ミスリルの月があかるい) 指輪から指をはずしてわたしに戻す

特別でないもの同士の

薄荷。

照らされた道行きなすむ特別でないもの同士の犬とわたしと  
 じゃがいもをマッシュするとき何ものか知らない気持ちも押し潰している  
 包み紙しずかにはがしてチョコレート知らない国の歌がきこえる  
 車窓から眺める景色は明るくて街の切れ目に咲いたコスモス  
 号泣の形の文字が並んでいる書簡を読みに行く博物館  
 ブロンズのカラスの像のくちばしの先にとまっている赤とんぼ  
 秋風を吸い込んでいる気管支はきつとセピアの色をしている  
 行き先を示す真つ赤な矢印を指で辿れば遠い夕焼け

サボテンも上手に育てられなくて正しさだけの世界はまぶしい  
 「対処法／サボテン／腐る」 検索を試みるけれど神様はいない  
 棘のある言葉に幾つ傷ついて来たんだらうねあなたとわたし  
 食べるつて選択肢もあるサボテンのステキだつてミニチュアメキシコ  
 鉢を替える手際の悪さは見逃して あなたみたいな棘が痛い  
 ふたりとも間違いだらけ マニュアルがあれば上手に育ったのかな  
 愛情を与えずに育ててもダメなこと教えて散ったふたりのサボテン  
 神様の箱庭で生きる毎日にまた凝りもせず君を育てる

自由律の歌

ひなお

夕焼けが海を染める 足跡は砂浜に残り波の音が耳に響く  
 散歩へ出たいが止めたらと女房が言う 確かに日差しは強い  
 飛んできた蟬が止まりそこねて飛び去って行った 電柱が残る  
 雨が止んで晴天 散歩に出ると朝から蟬がうるさい  
 テレビで見たゆで卵の作り方を試す我ながら上手い 毎日作る  
 女房が出かけていった 昼はカップヌードルいや酒にしよう  
 ベランダに蟬が転がっている 小突いたら慌てて飛んでいった  
 七十五か砂時計の砂があと僅かなのが目に見える

居酒屋のランチメニューの定食の有頭海老の刺身に驚喜

◆ 涸れ井戸

真昼にも星は変わらずあるはずでもっと早くに気付きたかった

◆ 河岸景都

真昼間も出てゐる星を掴み取るやうに手足を伸ばすみどりご

◆ 君村類

この恋は昼に浮かんだ月のよう霞んで見えて手に届かない

◆ 久保田毒虫

陽だまりの匂いが肌にうつりそう膝でまどろむ仔犬にふれる

◆ くうたか湖春

太陽の白いヴェールに溶けていく流れる星に漕ぎ出す舟も

◆ さんそ

真夜中のギリシャヨーグルトにからむ昼の記憶は海に似ている

◆ 西鏡

昼の月ほどの淡さでさりげなくあなたのそばで役に立ちたい

◆ 睡密堂

ほんとうにきれいな時間ほんとうにかなしい時間 午後四時の空

◆ たえなかず

昼下がりスパイスカレーを食べているあまい言葉の要らない人と

◆ 千原こはぎ

昼下りシエスタからのサボタージュ生きてていいか鯖雲に訊く

◆ ともえ夕夏

正しい幸せに満ちた休日の晴れた昼間の公園が好き

◆ 内藤うく

# 「昼」

## テーマ詠

- ◆ 麻倉ゆえ
- ◆ 有村桔梗
- ◆ 井倉りつ
- ◆ 石川順一
- ◆ 入谷聡
- ◆ 宇井モナミ
- ◆ 宇祖田都子
- ◆ 泳二
- ◆ 片羽雲雀
- ◆ 香椎柳
- ◆ 歌島孟
- ◆ 長雨の土に祈りのキスひとつまひるを見せよネオ葉緑体
- ◆ 真昼間の暗い雨林へさしそそぐ希望は光のように揺らいで
- ◆ 真昼間に願ひひとつも託されず軽やかに飛ぶ白き流星
- ◆ 街路を歩く真夏まひるま蟬の声ひとつもしない真夏まひるま
- ◆ 昼間から酒を飲むのは日曜日中華料理を楽しむ六日
- ◆ この恋を追うのはやめよう 日曜のフードコートで氷を捨てる
- ◆ まひるまのカフェの窓辺にやはらかな冬のひかりと相席になる
- ◆ 昼前に家事をこなせるようになり遅咲きだけど私は伸びる

### ステイグマ

福山桃歌

乱暴に愛をぶつけたときにしかさわれなかった感情だった  
 なんてかな大事にしたいと思うのに剥がれて落ちる鱗がきれい  
 針のような雨に刺されて血が滲むまでもないのに痛みだけある  
 がらんどろ（わたしのための救いなど世界のどこにもないという意味）  
 届かない祈り 聞こえない声 受け取られない愛 世界は溶けて  
 はりぼてで埋めたらきつと満たされてその程度しかない深みだらう  
 傷ついたことだけこんな鮮やかに何かの模様みたいに残って  
 今までの呼吸の数だけキスをするこれがわたしの産声になる

### 赤く実る

本条恵

「買いませんか？りんご」と声をかけられる四つ辻 おそろくいけないうりんご  
 人だけが罪を犯せる 見慣れない車の荷台に罪無きりんご  
 花の季には名を知っている木々だったはずの裸木しずかに並ぶ  
 さりさりと削られてゆくものはなに 落ち葉を踏めば秋の夕さり  
 赤い実が次々実る木のようにまた指先に傷ができて  
 喫茶店の木のテーブルの年輪のその真ん中に置くカプチーノ  
 常夏の国の木々にはないという年輪 これは冬を知る木だ  
 木の梁に貼り付けられたルーターはことばを吸って吐いては光る

### ドライブに連れてって

まさけ

後輩がボクスターで海に行くその日は豪雨になれよと思う  
 セフィーロと名前を聞けば元気かと条件反射のように部長は  
 ANZに乗り込むお隣の窮屈そうで満足な顔  
 父親がブルーバードに乗って行き出ていったまま帰ってこない  
 ドライブに連れてってっていう人が今井美樹にはならぬ現実  
 右手には競馬場ではなくケバいホテルが並ぶフリーウェイ行く  
 ガタが来たワゴンRで海を過ぎよく出るといっパチ屋に向かう  
 負け込んだ外は大雨溶けるよに走るパニラの車が眩し

### 玉の緒

松本直哉

焼きざかなほぐしつづいふもしかしてわたし妊娠してゐるかしら  
 うしろ手にブラの留め金はつしけり月かげしるくてらす横顔  
 イヤフオンをシェアしてパツハ聴きをりぬ予定日すぎて子を待ちながら  
 陣痛に耐ふるつまの手にぎりをりいたみをわかすべあらなくに  
 生ましめしのちのよふけのしづもりに老助産師のたばこゆらす  
 みどりごはなに夢むらんまつげ濃きねむりのなかのほのかなる笑み  
 抱きあげて高いたかひをするたびにはじけるやうにわらひたりけり  
 をさなごにちひさき靴をはかすあさきみにとつてはすべてが未踏

触れるものすべてが  
ハズキルーペになるミダス王

御糸さち

ドロインで見たい自分のつむじ 雨上がりくらいに光つてて  
モンゴルの子はトナカイで学校へ私は夢で銀行へゆく  
あじさわうハズキルーペのポスターの館ひろし史上最大の笑み  
触れるものすべてが何になったなら幸せだったろうミダス王  
理不尽に理不尽で立ち向かうときそれはそれとして傷はついてる  
残照だ それをそれだと確かめる隙に世界をぐるむ暗闇  
人間は花ではなくて花器だからどんな花でも咲かせられるよ  
「この短歌ぜったい私のことだよね」子に探られて冬の入り口

午前零時の Red or Black 〽 『ダンス・マカブル 死の舞踏』より 〽

深影コトハ

一輪の花をナイフに見立てれば縦に裂けゆく満月だった  
死神が鎌を構えているように二つの針が重なる時刻  
踝の骨を削った賽子を転がし転がされて奈落まで  
強すぎる酒を煽ってバーストに気付かないまま踊れよもつと  
切っ先を廻して決める roulette に脳が軋んでゆく音がする  
赤ならば憐みたまえ黒ならば羨みたまえ 平等な死を  
消毒を始めるように地下室へ射し込んでゆく朝の光は  
雄鶏が鳴いた気がした 目隠しを外せば宗教画のような街

できますすとも

六厥めれう

かぶりつく場所に戸惑う厚切りの六法全書みたいなトースト  
誰ひとり口をきかないテーブルに食卓塩がかがやきを増す  
午後からは晴れると聞いて捨て場所困った傘で家を出てきた  
髪の毛の乱れをそっと直すとき影のほうでも合わせてくれる  
あの人の留守を守っているようなデスクの上の多肉植物  
本体にボタンはなくてそのせいで電池を入れるリモコンがある  
できませんの範囲を広く言いすぎて残業してもできそうにない  
いさかつて自席を蹴って出た人のデスクトップに波紋広がる

蜂蜜は気だてが優しくて

村田一広

気ぜわしい夏過ぎてアイスクリームをゆつくり食べる秋の真ん中  
おつとりとしてる蜂蜜さかさまになつた瓶でも眠りたるまま  
扇子のやうに拡げる仕草楽しくてつい求めたる葉書100枚  
「煙くてすみません」と焼肉をしている。ならば仲間に入れてください  
無人駅は町中なれど電車発てば静寂に包まれる一時間  
猫たくさん飼つてる家だからといつて捨て猫が混ざつたらすぐ分かる  
あらぬ方見て咲いてゐる薔薇園のあるじ行方不明になつた薔薇  
リトグラフで描きしごとくアンドロメダ星雲が窓に迫る秋の夜

罰よりラブ

南の島

ちろ、つ、つ、ゆるむ蛇口を締めなおすわたしは今日もいい人だった  
熱中症けがに個性に肯定感守る令和の大運動会  
ただそこに若い命があるだけで世界は美しいかもなんて  
「今の子は」ちくりと刺さる職員室罰よりラブで成長したい  
済の字が渚に見えて削つたり加えたりする書類と体  
自販機とトイレと生徒指導室だけの明かりがついている廊下  
かけがえない経験をしたいのにみんなと違うと不安になるの  
なんで捨てないの？映画の半券でまたがんばれるときがあるから

透明な薔薇

水也

何色になれるかなんてわからない今日を走っていくぼくたちは  
あこがれを胸にいだいて手を伸ばす指先でふれた冷たい朝  
ふつうにもなれないここにいたくない ひかる朝露踏み出してみ  
あやまずに在れたらいいかそれよりもきりひらいてく明日を見せて  
いつか、にはまだまだ遠い一歩ずつ進む僕らの足あとに花  
だれよりも先ゆくひとよ手を伸ばすとなりに並ぶゆめをみていた  
にすぎた味も違和感もそのうちひとつになつて、同じになつて  
結局はだいたすきだつて伝えたい透明な薔薇抱く可能性

20241031

森内詩紋

8号車15列Cの席に着き10年ぶりにいざ一人旅  
酔い止めを飲もうとしたが茶の蓋が開かない やさしいレイボスなのに  
すぐ効くという箱書きに期待して白く小さき1錠を飲む  
そういえば新幹線の車窓から実家が見えるんだつたな、確か  
赤、茶色、モーヴ、シルバー、黒、黒、黒どれもゴツツイスーツケースだ  
仙台で乗り込む人の大半が牛タン弁当携えており  
前列のヒトよ惜しいな「一首」だよ あと短歌には季語は要らない  
福島を過ぎれば次は郡山ここから先はぼくには異郷

火をおくりたい

杜崎アオ

まちなかに焚き火の諸島 蓋つきのコーヒーをみな両手でもって  
ひっそりと屋根は閉ざされストリートピアノに冬のけものけはい  
入れかわるもちぬしたちをつれだして人より古書は遠い旅する  
まぼろしに瘦せさらばえた白猫の路地いつの日もおわりはちかい  
少しづつきみにこころを明けわたす栗の渋皮むくようにして  
くらがりをおそれることに理由などなかった胸へ火をおくりたい  
白昼夢のような淡いあいさつをかわして町はさだまてゆく  
西風にふるびた弓をききながらおもつた冬のはじまりかたを